

「遥かなる友人」—民話の神学の視点から

澤 村 雅 史

(2010年11月12日受理)

“Harukanaru Yuujin”(Friends far away) —from the view of Folktales Theology

Masashi SAWAMURA

Abstract

In this study, an episode from “ULTRAMAN” is read as a theological folktale, according to the approach of “Theology of Folktale”, which has been attempted by C.S.Song and T.Kuribayashi.

Key words: 民話の神学 Theology of Folktale, ウルトラマン ULTRAMAN, 隣人愛 Love for neighbor, 終末論的実存 eschatological existence, 「私には夢がある」 “I have a dream.”, 悔い改め metanoia, 信仰 faith

1. はじめに 民話の神学の視点から“サブカルチャー”を捉える

台湾出身の神学者・宋泉盛は、アジアにおける神学の構築を呼び掛け、エキュメニカル運動に大きな貢献を果たした。その言説の特徴は、「西洋列強による植民地化、それと歩調を合わせたキリスト教伝道が、アジアの固有な文化を無視、ないし破壊したことを批判的にえぐりだし、神学にアジア人がもつ考え方や感情、文化一般の回復を提唱した」(栗林〔2010〕 p 78) ところにある。その著作は、欧米中心の神学を脱構築し、アジアの他宗教への寛容、いや、むしろ「ひびき」合いを肯定的に認める姿勢に彩られている¹⁾。これは、欧米中心の伝統的な神学からすれば逸脱に見えるものの、むしろ聖書が伝える「福音」へのラディカルな回帰を目指した“跳躍”であるといえよう。

宋の神学を独特のものとしているのは、このような問題意識とともに、そのアプローチにおいて「民話」という題材を用いていることである²⁾。宋は「民話やおとぎ話には何かしら深いもの—文化的なそして精神的な深みといったものがある。(中略) こうした物語は、本質的に、人間の生きざまの比喩なのである。私たちはこれらの物語のなかに、もっとも素朴でありながらももっとも深い、もっとも単純でありながらその深みを余すところなく表わし、もっとも野卑でありながらももっとも感動的な民衆の神学を見出すのである。」(宋〔1984〕 p 13) と述べる。宋が民話を題材に取るのは、それが“民衆”のなかで語り継がれてきた物語だからである³⁾。

この宋の視点を取り入れ、「民衆の経験に神学を結ぶ」(栗林〔1997〕 p 21) ことを試みたのは栗林輝夫である。口から口へ、ぬくもりをもって伝承されてきた物語に、名もなき民衆の叫びや智慧が幾重にも塗りこめられていることに着目して、讃岐の民話を題材に「人々の深い宗教的霊性 (spirituality)」・「超越的なもの、永遠的なもの、途絶えることのないものへの、人々の『神学』」(前掲書・p 19) を見出し、きわめて現代的な問題意識や神学アプローチと対話させることを、栗林は試みている。

本稿ではこれらの刺激的な試みを手本として、“ウルトラマン・シリーズ”の一エピソードから「神学する」ことを試みたい。民衆の語りの蓄積である民話と、現代の子ども向けテレビドラマとでは隔たりもあるが、そこには共通点もある。まず第一に、どちらも周縁的な文化として位置づけられてきたことである。次に、しばしば周縁化されたものたちについての語りを含むことである。「異形、異教、異文化、異民族・・・人々は、差別して除け者にし、恐れて滅ぼしてきた異質な人間のことを『怪物』として語り継いできた」(切通〔2000〕 p 11) 系譜を、ウルトラマン・シリーズの諸作品は確かに受け継いできた。このように見れば、テレビの子ど

も向け番組は、民話が果たしてきた機能の一部を受け継いでいるとはいえないだろうか。

こういった見通しのもと、本稿では「ウルトラマン・マックス」第25話「遥かなる友人」を題材として、「神学的な漂流を試みる」(栗林〔1997〕 p26) こととしたい。

2. 遥かなる友人

「ウルトラマン・マックス」は2005年7月から2006年4月まで放映されたテレビシリーズで、全39話からなる。“怪獣”(巨大なモンスター)や“異星人”(地球外生命体)が跳梁跋扈する世界において繰り広げられるドラマを描く、(基本的に)一話完結のシリーズである。主人公であるトウマ・カイトはDASHと呼ばれる特殊部隊(劇中で、怪獣や異星人がからむ事件を解決するためのプロフェッショナル集団として設定されている)に属し、危機が訪れるとウルトラマンに“変身”し、怪獣や異星人と戦うなどして危機を解決する。30分1話完結形式において展開される物語の基本様式は1967年放映の「ウルトラマン」以来、もはや古典的^{クラシカル}といつてよいほどに後続の“ウルトラマン・シリーズ”や派生・類似の巨大変身ヒーローものにおいて踏襲されてきた。一方で、このほぼ定型的なフォーマット内で描かれるエピソードは、冒険もの、SF、ホラー、コメディ、ファンタジー、社会に対する問題提起を含むものなど、まことに多種多様である。

PTAなどによる批判や関連商品売り上げの伸び悩みを理由に、1980年放映の「ウルトラマン80」を区切りとして同シリーズは一時期テレビから姿を消すが、1996年放映の「ウルトラマン・ティガ」以降のいわゆる“平成3部作”においてテレビ番組としての復活をとげ、以降テレビや劇場映画、オリジナルビデオなどのメディアにおいて展開されてきた。本シリーズのひとつの特徴は、「原点回帰」というコンセプトのもと、続く「ウルトラマンメビウス」とともに、旧ウルトラマン・シリーズへのオマージュ的要素を多く含むことである。「遥かなる友人」(以下「本編」)はその第25話として放映された作品であり、脚本家の太田愛によるシナリオに基づく作品(監督:八木 毅/特技監督:鈴木 健二)である。太田愛は、「ウルトラマン・ティガ」においてプロデビューした作家であり、特に初期の作品においては、独特の郷愁を漂わせたジュブナイル的作風において、社会の片隅に忘れ去られていくものたちや、異形のものたちに向ける暖かい視線が特徴的であった。

少年と異星人

本編エピソードの導入で描かれるのは、地球人の少年・駈(カケル)と、異星人・キーフとの出会いである。夜、自室で眠りこけている駈の部屋に突然、異星人・キーフが現れる。彼は

当初、緑色の光として部屋に侵入するが、駈の部屋に散らかっていた雑誌に載っていたバスケットボール選手の姿に変身する（その変身の過程で一瞬、キーフ本来の異形の姿が垣間見える。シナリオでは本来、「角などあるバリバリ怖そうな異星人」と指定されているが、製作の段階で銀色の甲冑のような姿に変更されている）。初対面の異星人と駈少年の間には当初、「あんた、破壊したり、征服したり、操ったりしないよな」・「(驚いて笑う) しないよ、そんなこと」というやりとりが交わされるが、スターと慕うバスケット選手の外見に安心したのか、両者はすぐにうちとけて親しくなる（両者の間に生ずるはずの葛藤がほとんど描かれなないのは、主に番組の30分枠という都合によるものと考えられるが、その後の展開を際立たせるための大胆な“民話的”捨象・単純化と受け取ることもできる。「竹取物語」・「桃太郎」などの民話でも、光り輝く竹や、川を流れる巨大な桃の発見に関する驚愕は語られても、発見者の心理的葛藤は語られることはない）。

キーフは寿命が付きかけた母星・ネリルから、移住先を探すために旅立った宇宙飛行士であるという。しかし彼の努力も虚しく、惑星ネリルは消滅し、ひとり宇宙をさまようキーフはようやく「初めて出会った命の惑星」である地球に降り立ったのだという。彼が乗ってきた宇宙船は、大気圏突入時に炎上し、この近辺に墜落している。彼には帰る場所も手段もないのだ。キーフの孤独を思いやる駈は、「俺、明日地球を案内してやるよ。きれいとこ一杯あんだ」と呼びかける。

翌日、広々とした公園を嬉々として走り回るキーフと、やや戸惑いながらそれを追う駈。キーフは木々や水などの自然、そして人々とのちょっとした交流に、いちいち大きく感激している様子である。駈はキーフに「このまま人間のカッコで暮らせばいいじゃん」と提案するが、キーフは「なぜそんなに僕に人間の姿でいろっていうんだい?」といぶかしむ⁴⁾。駈はこの質問をはぐらかすが、キーフは公園のゴミ箱に捨てられていた新聞からその答えを得る。その第一面には、巨大な異星人が燃える街に屹立する写真とともに「またも地球の敵・異星人現る! 街に大きな被害!」との扇情的な見出しが躍っている。

キーフ「・・・駈、地球の人達は、異星人を敵だと思ってるんだね? それで駈は僕に人間の姿でいろって言ったんだね?」

駈「・・・地球じゃ、異星人は人間を傷つける者、侵略しに来る者だと思われてる。俺も・・・キーフに会うまでそう思ってた。仕方ないんだ。今までずっとそうだったから」

(シナリオより)⁵⁾

物語中の世界では日常的に異星人による破壊や侵略が繰り返されている“現実”が、ここで明らかにされる。多くの人間の中に、異星人に対する恐怖心や敵意があることがほのめかされる。物語において直接語られることはないが、駈の周囲にも何らかの被害が及んでいたとしても不思議ではない。

折しもそこに、DASHのパトロールが現れる。どうやら昨日墜落した宇宙船とその乗組員を捜索している様子である。ここでキーフは意外な行動に出ようとする。彼を探しに来たDASHに正体を明かし同行を申し出るというのだ。必死でとめる駈をやさしく微笑んで押しとどめるキーフには、何かの決意があるようである。

異者・他者・隣人

場面はDASHの本部へと移る。そこでDASH隊員たちは、様々な調査・尋問に耐えるキーフの映像を見守りながら、その“非人道的”な扱いに対して憤る。キーフを徹底調査しようとする科学者集団に対し、本来異星人に対して調査・防衛の任務を担うはずのDASHは、ここではキーフの味方・弁護役に回っている。

科学者 「我々は一刻も早くあの異星人（エイリアン）の全てを知る必要がある訳です」

ショーン「(静かに) キーフ」

科学者 「？」

ショーン「彼の名前はキーフです。“あのエイリアン” じゃない」

(シナリオより)

ここで静かに憤りをぶつける隊員、ショーン・ホワイトは、白系アメリカ人の俳優（ショーン・ニコルス）が演じている。外見の異なる外国人をさげすみ、あるいはよそよそしく、そして時には（呼びかける側の一方的な）親しみを込めて「ガイジン」（＝エイリアン）と呼ぶ我々の日常に気づかされるシーンである。キーフを「名」を持つ人格的な存在ではなく、実験対象・尋問対象としてしか扱うことのない無表情な科学者集団は、見知らぬ他者に対してどこまでも冷酷・残酷になることができる人間というものを象徴しているかのようである。

このような人間の醜さ・差別性を強烈に描き出しているのは、1971年のウルトラマン・シリーズ第3作「帰ってきたウルトラマン」第33話「怪獣使いと少年」である。川崎市のとある河原

で何かを探すかのように日々地面を掘り起こす少年がいる。周囲の人々は彼を「宇宙人」(＝異星人)と恐れ、蔑み、いじめの対象とする。商店街を歩けば石を投げられ(予告編でのみ登場する場面。制作側の判断により放映作品からはカット)、一切れのパンすら買うことも拒否される少年は、幼くして両親を亡くし、河原の廃屋に住む金山と名乗る初老の男性を慕って、共に暮らしている。じつはこの金山こそが密かに地球の調査に訪れた宇宙人の仮の姿であるが、その体は公害に汚染された地球環境に適応できず日々蝕まれ、枯れ木のように朽ち果てようとしている。少年は彼のために、彼が河原に埋めて隠したという帰還用の宇宙船を探して地面を掘り起こしているのである。物語後半、宇宙人に対する恐怖から暴徒と化した民衆が、廃屋へと殺到し少年を外へ引きずり出す。止めようとする金山老人はもみ合ううちに警官の誤射によって(もともとの描写では竹槍で貫かれるという残忍な場面が、制作側の判断により異例のことながらリメイクされたという)命を落とす。その瞬間、地面に眠っていた巨大な怪獣が目覚まし(金山老人が念動力で封印していたという設定である)、街を破壊し始める。

視聴者である子どもたちの心に強烈な印象を残したこのエピソードは、当時若手で意気盛んであった東條昭平監督⁶⁾と、ウルトラマン創成期から関わり続けてきた沖縄出身の脚本家・上原正三のコンビによるものである。あまりに生々しい作品であり局内でも大きな問題となったこの作品ゆえに、上原はこの後、本シリーズのシナリオ担当をはずされたという(切通〔2000〕p208)。上原自身はこの作品について「あの作品は僕のなかの差別に対する反発がちゅっと出すぎていて、自分としては気に入っていません。いつもはもうちょっと自分の本音は殺して書くんですけども、あのときはナマ過ぎたというか」(前掲書・p208)と語っている。

このエピソードの中で語られる登場人物の言葉に「日本人は美しい花を作る手を持ちながら、一旦その手に刃を持つと、どれだけ残虐窮まりない行為をする事か・・・」という台詞がある。身内と認識するものに向けては惜しめない愛情や庇護を与えるが、同時に、そうでないものに対してはどこまでも冷淡に、さらにいったん敵となったものに対しては徹底して残酷にふるまうことができるのが人間の持つ一面であろうか。

上智大学で教鞭をとるイエズス会神父、ハビエル・ガラルダは、数名の学生とともにラッシュ・アワーの電車に乗ったときの出来事について、「車両はおそろしく混んでいたが、仲間の一人の男子学生が突撃精神で入り込んで、左右の『敵』をしっかり押しつぶしたうえ、みごとに一つの席を取った。そして、勝利感に満ちた表情で『先生!』と叫んで、戦いでかちとった席を嬉しげに譲ってくれたのである。なるほど、それはきわめてありがたい。でも、ショックであった。裏を返せば、あの明るい学生にとって、好き嫌いや仲間意識というエロスで造られた自分の輪に入っている人は、実に大切であるけれども、自分と関係のない、車内の大勢の他人は、

文字通りに関係のない存在になっている感じであった」(ガラルダ〔1995〕p12)と述べている。そして、仲間内に向ける愛であるエロスに対置されるものとして、隣人愛(アガペー)に言及している。

隣人愛を示す聖書の箇所として、比較的多く引用されるのは、イエスによって語られたとされる「サマリア人のたとえ」と呼ばれるエピソード(ルカによる福音書10章25～37節)であろう。

²⁵すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」²⁶イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、²⁷彼は答えた。『「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」にあります。』²⁸イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」²⁹しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。³⁰イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。³¹ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。³²同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。³³ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、³⁴近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。³⁵そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』³⁶さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」³⁷律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

当時の宗教家であり社会的エリートである「ある律法の専門家」による問いかけからはじまるこのエピソードは、いわゆる「論争物語」の様式において、イエスのものとされるメッセージを伝えている。「永遠の命」への関心と、イエスに対する論争的な意図に基づく質問に幕を開ける本エピソードは「隣人とはなにか」という問いを軸に展開する。永遠の命を得るためには、律法の定めに沿って、隣人を愛することが求められるという自答へと誘導された律法の専

門家はそこで、「自分を正当化しようとして」隣人とは誰か、とイエスに尋ねる。

「自分を正当化しようとして (ὁ δὲ θέλων δικαιῶσαι ἑαυτὸν, but willing to justify himself, 彼自身を義とするよう意図して)」発せられた質問は、“隣人”の範囲を限定することを意図していたと思われる⁷⁾。イエスが答えとして語るたとえ話に登場する“サマリア人”とは、アッシリアの征服(前8世紀)による異民族との混血政策によって、人種的・宗教的にイスラエルから分かれて独特の発展を遂げた“サマリア教徒”(『サマリア』『岩波キリスト教辞典』〔2002〕p436)のことである。おそらくユダヤ人であった強盗被害者を、高潔な人格者であるはずの宗教者(祭司・レビ人)が見捨てて一方で、当時ユダヤ人と対立関係にあったはずの“サマリア人”が手厚く救助する、というところにこのたとえ話の意外性がある。ただし、わざわざ「道の向こう側を通って行った」宗教者たちには、瀕死の怪我人を忌避することで宗教的清浄を保とうとする動機があったとも考えられる⁸⁾。一方で、サマリア人が駆け寄って強盗被害者を救助した動機は、ただ見て「憐れに思」った (ἐσπλαγγνίσθη / σπλαγγνίζομαι = 断腸の思いを持つ) ことに尽きるという。彼は二次被害の危険も顧みず、時間と多額の費用(2デナリオン = 2日分の賃金に相当)を費やして見知らぬ人を助けた、というのである。

この驚くべきエピソードに続けてイエスは質問者に「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」(36節・下線は筆者)と問い返す。「隣人」とは「○○である」と定義し、線引きすることができるようなものではなく、「なる」ものだ、というのである。「隣人」に関する排他的(exclusive)な閉じた定義から包括的(inclusive)な開かれた地平へ、根本的な発想の転換をイエスは示したのである⁹⁾。

では、「他者」から「隣人」へ、その一步を我々はどのようにして踏み出すのか。

「最初の一人」という覚悟

本編では、科学者集団の調査・尋問の隙をついて、DASHの一員であるカイト(前述のように、危機に際してウルトラマンに変身して戦う本シリーズの主人公だが、本エピソードではむしろ脇役に回っている)はひそかにキーフのもとを訪れる。

カイト「なぜ逃げ出さないんだ？こんな思いしなくても、君は光粒子体になって今すぐここから逃げられるんだろ？」

キーフ「ああ。だけど、今逃げれば、人間から信頼は得られない」

(シナリオより)

この密会の後、カイトはキーフの伝言を携えて駢のもとを訪れる。徹底した調査のためにオランダ・ハーグの研究所に移送される前に、キーフは駢に会っておきたいというのだ。衰弱したキーフは、ハーグの研究所で命を落とすかもしれないことがほのめかされる。

カイト「キーフは君に会いたがってる。彼の体は弱ってるんだ。(中略) キーフは今日の夕方、ハーグの研究施設に移される。(中略) どうする。君が決めることだ」

駢 「・・・キーフが人間の姿になるんだったら、会う」

(シナリオより)

護送される直前に、カイトらは駢をキーフに合わせることに成功する。ここではじめてキーフは、駢に向かって、彼が甘んじて連行されるに至った決意を語る。

キーフ「駢、君にどうしても話しておきたい事があったんだ。(中略) 僕のあとも、この美しい惑星を好きになって心から人間と友達になりたいと思う異星人がきっと現れる。でも、彼らが僕のように人間の姿になれるとは限らない。(中略) 彼らは異星人の姿をしてるせいで侵略者だと思われてしまう。そんな時もし過去に一人でも人間の信頼を得て本当の友達になれた異星人がいたら、少しは違うと思うんだ。僕はね 駢、その最初の一人になろうと決めたんだ」

駢 「・・・キーフ、ネリル星人の姿になってくれないか」

(シナリオより)

それまで、地球人の姿をしているキーフを友人として受け容れることはできても、異星人の姿であるキーフを受け容れることはどうしてもできなかった駢は、キーフの思いを知り、ようやく彼をありのまま友人として受け容れる。外見（そしておそらく習慣・文化）の違いを乗り越え、互いに受け容れあう遥かな未来の友人たちを思い描いて、キーフは「その最初の一人になる」という覚悟を、自らの行動原理としたのである。

C. S. ルイスは、「宗教と宇宙開発」と題したエッセイにおいて、地球外生命体について、次の5つの観点から考察している。1) 地球外生命体の存在の有無、2) それは理性的あるいは霊的存在か、3) キリスト教的な意味で墮罪しているか否か、4) イエス・キリストの受肉

と受難は有効か、5) その存在の贖罪のためにイエスの受難以外の筋道はありうるか。このように考察したのちルイスは、これまでに人類が異民族との接触において犯してきた強欲な収奪や、高慢で一方的な教化・文明化が、地球外生命体と人類との邂逅において再び繰り返されることを憂慮し、次のように述べている。「ただわたしに言えることは、今この場で、そういう出会いに備えて、ただ一つわたしたちにできる実際の心構えとして、人皆が、いっさいの略奪と、いっさいの神学的帝国主義を防ぐ堅い守りを貫く決意をすることです。それはおもろいなど言えるものではありません。わたしたちは人類のうらざり者だと言われもするでしょう。ほとんどすべての人間から、宗教家の一部からさえ憎まれもするでしょう。しかもわたしたちは一歩たりとも譲ってはならないのです。先ずわたしたちの敗北ということになろうとも、義のための戦いに倒れようではありませんか。わたしたちの忠誠は、人類ではなく神に帰すべきものです。神の子たちである、あるいはそうなりうる者たちこそ、たとえ彼らに殻や牙があろうと、わたしたちの真の兄弟です。たいせつなのは精神の血縁であり、生物学的なそれではありません」(ルイス〔1976〕 p 40)

ルイスは地球外生命体の発見という「遠い先のこと」に仮託して、人間がこれまで引き起こしてきた、そして今まさに引き起こしている、異者・他者への無理解や不寛容の問題を説いているのではないか。我々が自らのうちにある「神学的帝国主義」に気づき、捨てなければならないのは、遠い将来の出会いに備えてだけではなく、いま、我々が対面している他者に対してであるのだ。

憧れ・Dream・信仰

本編では、駄少年とキーフが再会を果たした丁度その時、巨大な異星人が突然に出現し、街を破壊しはじめたとの一報が入電する。それを聞いたキーフは光粒子体となって飛び去ってしまう。場面は一転し、夜の街、破壊の炎に照らされる巨大な異星人(ゴドレイ星人)、一般市民の避難を誘導し、一方でゴドレイ星人への攻撃を試みるDASH、といった情景が次々に描かれる。ゴドレイ星人は甲殻類と機械が融合したような姿で、一切の言葉を発せず、ただ絶対的な悪意の象徴のように不気味に街を破壊し続ける。目的・理由も定かではない。カイトは乗っていた戦闘機が撃墜されるとともにウルトラマンに変身、ゴドレイ星人に立ち向かうが、圧倒的なパワーの前にたたき伏せられてしまう。

避難する人々の中にはキーフ(人間体)の姿が。「なぜこんなひどいことを…」と呆然とつぶやくキーフ。そのとき、ゴドレイ星人が避難する人々に向かって破壊光線の狙いを定める。とっさに光粒子体になって破壊光線を受け止めるキーフ。犠牲となった彼の体は光となって飛散する。破壊光線を放出しつくした一瞬について反撃し、ゴドレイ星人を倒すウルトラマン。

しかし破壊の炎に照らし出される虚ろな夜空に、勝利のカタルシスは無い。

場面は数日後へ移る。

駢が一人、キーフと遊んだ公園に立っている。

夕暮れの風が流れる。

傍らに静かにカイトが現れる。

(中略)

カイト「キーフは言ってた。『憧れは、僕たちの手と足を動かす。躓いても倒れても、あのはるかな地平に辿り着こうと、僕たちは歩き続ける』」

キーフの言葉を胸に広い公園に目を向ける駢。

(中略)

駢 (M)「俺は、キーフが憧れたはるかな地球の未来を思った。・・・大気に溶けたキーフは、きっとこの地球の風の中にいる。そして、大地を吹き渡りながらキーフは、この惑星の未来を見つめている。そう思った」

(シナリオより)

カイトは駢にキーフからの伝言を伝え、彼を駆り立てたものは、「憧れ」であったと告げる。しかしこの「憧れ」は、漠然とした夢想ではなく、「僕たちの手と足を動かす」もの、すなわち足元の現実世界において具体的・現実的になすべき行動、歩むべき一歩へと駆り立てる「憧れ」である、というのだ。

黒人差別の解消を求めたアメリカ公民権運動を指揮した一人にM. L. キングJr.牧師がいる。彼は1963年の「ワシントン大行進」において、“I have a dream.”という印象的なフレーズで人々に記憶される演説を行った。

I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed: “We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal.”

(中略)

I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.

I have a dream today!

20万人がワシントンD.C.のメモリアル・パークに集ったこの大規模な集会は、公民権運動の興隆の中で実行に移された示威行動である。当時、リンカーン大統領による「奴隷解放宣言」から100年を経てなお、アメリカ社会には黒人に対する苛烈な差別が残り、「人種隔離法」によって、あらゆる差別的な扱いが正当化されていた。1955年には、ローザ・パークスという女性が、「白人のためにバスの席を譲らなかった」として逮捕されるという事件が起こった。当時のバス車内は前方の白人専用席と後方の非専用席に分かれていたが、「もし白人専用席がいっぱいになり、さらに多くの白人が乗ってきた場合には、非専用席に座っている黒人がしばしば立って自分の席を譲るように命じられたのである。そして黒人がその命令を断ろうものなら、逮捕されたのである」(キング／カーソン〔2001〕p73)。

この事件を契機に、抗議運動として大規模なバス・ボイコットが行われた。この運動を通じて指導的な立場にあり、一貫して非暴力による抵抗を唱え続けたのがキング牧師である。彼はインド独立の父、マハトマ・ガンディーの非暴力抵抗運動を手本とし、また、ガンディーも影響を受けたイエスの山上の説教を精神的支柱としたという¹⁰⁾。キング牧師は、バス・ボイコットが成功を収めた後、誹謗・中傷を受けるのみならず、妻と幼い娘がいる自宅に爆弾を投げ込まれたり、不当に逮捕・投獄されるなどしながらも、非暴力を呼びかけ、また自身もそれを貫いた。

「真の非暴力的抵抗は、悪の力への非現実的屈服ではない。それは暴力の行使者となるよりその受領者となる方がよいと信じて、愛の力によって勇敢に悪と対決することなのである。」

(前掲書・p156)

ワシントンにおける演説には、“I have a dream.”とともに、その“dream”が実現する時として“one day”という言葉が繰り返し用いられる。それは漠然とした将来への展望ではない。またクロノロジカルに定めることができる時間的な点でもない。「いまだ」実現してはいないが、「すでに」実現したものとして語られる時＝終末論的な時(カイロス)なのである。従ってキ

ング牧師が語る“dream”もまた、漠然とした夢想などではなく、それを抱くものにとって、今・ここで生きるべきリアリティなのである。

マルコによる福音書は、イエスが宣教のはじめに告げたメッセージを、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコによる福音書1章15節）という、「神の国」（ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ）＝「神の支配」の終末論的な到来の実現の告知として伝えている。この告知は（マルコ福音書における）イエスの使信全体を要約している。

山浦玄嗣は「ケセン語聖書」において βασιλεία（バシレイア）を「お取り仕切り」と訳し、「バシレイアはどこか遠くに、多分死後に行くあの世の『国』ではなくて、神様のお取り仕切り以身をゆだねる至福の『状態』のことである」（山浦〔2003〕p173）と解釈している。「神の国」とは、終わりの日にあるべき世界の姿であり、神が原初の創造時に「極めて良い」と呼んだ世界（創世記1章31節「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」）への回帰であり、すべての人が調和の中に生きる世界のことである。イエスは「時は満ち」（πεπλήρωται ὁ καιρὸς）、その到来が「近づいた」（ἤγγικεν / ἐγγίζωの完了形＝「近づくことを完了した」）ことを「福音」（εὐαγγέλιον）として告げるのである¹¹⁾。

「信じる」とは、神に対する漠然とした畏怖や信頼の感情ではなく、単に内心のありように終わるものでもない。「福音」に対する決断的応答であり、したがって実践を必然的に伴う営みである。マタイによる福音書には、イエスが弟子たちに「はっきり言っておく。もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない。」（マタイによる福音書17章20節）と告げる場面がある。「からし種」とはクロガラシ（*Brassica nigra*）の種子のこととされ、「直径1－2ミリの微小な黒っぽい色をした種子で発芽率がよく、速やかに伸びて2mくらいになる。肥えた土地に栽培すると4mにも達する」（大槻〔1992〕p81）という。当時の民衆が日常生活で一般的に目にする、極めて小さいものの一例として、ここでは引き合いに出されていると思われる。このたとえば「信仰を量化して大小、深淺のあるものとみなし、正しい信仰には神が自然法則を超える奇跡をもって応答するという、同時代のユダヤ教にも見られる信仰観を前提としている」（「からし種一粒ほどの信仰」『岩波キリスト教辞典』〔2002〕p236）言説であると解されることが一般的である。しかし、「信じる」とはそのように神の力に頼り、一切を奇跡に任せてしまうことに尽きるのではない。信じたことに対する決断的応答は、そこから必然的に実践を生み出すのではないか。山を移動させることが真に必要であるならば、座して祈ることには留まらず、傍目にはいかにそれが馬鹿げようと、スコップとバケツを持っ

て現場に赴くはずではないだろうか。熱心な祈りは、熱心な実践を生み出さないだろうか。神の恵みを乞い求めることは、その恵みに向かう決断的応答を生み出さないだろうか。

そのような決断的応答を指して、イエスは「悔い改めよ」(μετανοείτε／μετανοέωの命令形)と呼びかける。「悔い改め」とはキリスト教の伝統的な文脈では「神から離れている人間が、その全存在を神に復帰させる行為」(「悔い改め」『新聖書大辞典』[1971] p430-431)とされ、神からの離反の状態である「罪」との関連で語られてきた。しかし、釜ヶ崎・ふるさとの家で路上生活者・日雇い労働者とともに生きる司祭である本田哲郎は、「悔い改め」“METANOIA”とは本来、「悔いる」あるいは「改める」といった倫理上の価値判断を含むことではなく、「判断の基準・筋道」(NOIA／理性を意味するNOUSの変化形)を「変える・移す」(META)ことであり、視点(視線ではなく)を人々の苦しみ・痛みを共感できるところに移すこと＝「低みに立って見直す」ことだ、ということを経験的な実践に基づいて明らかにしている(本田哲郎[2001] p138-152)。

現実を見渡す限り、「神の国」はいまだどこにも存在はしていない。しかしすでに到来したとイエスは「福音」を告げる。その告知に応じて、他者と、隣人として調和のうちに共生する世界を「いま・ここ」において生き始めようとする、異者(エイリアン)として排除されているものの視点に自らを置こうと絶えず営み、その痛みを共感・共苦しようとするこそ、イエスが説いた「悔い改め」であり、「彼の活動は、その神の支配が決定的に顕在化し始める時の人間同士のあり方を、差別や搾取のない祝祭空間として予徴的・先取的に実現するものであった」のである(「神の国」『岩波キリスト教辞典』[2002] p231)。

キーフ「・・・僕はね駄、その最初の一人になろうと決めたんだ」

(シナリオより)

千の風になって

“Do not stand at my grave and weep.

I am not there; I do not sleep.

I am a thousand winds that blow,”

これはアメリカ人女性Mary Elizabeth Fryeが母を亡くして嘆く友人のために書いたとされ

る詩の一節である。その後、様々なかたちで広まり、日本では新井満の訳により「千の風になって」という題名で親しまれている。

本編は、キーフを喪った駢少年が、「大気に溶けたキーフは、きっとこの地球の風の中にいる。そして、大地を吹き渡りながらキーフは、この惑星の未来を見つめている。そう思った。」という独白とともに、美しい地球の全景が映し出される場面で終わっている。駢のこの言葉は、キーフが殉じた生き方・行動原理に自分もまた連なっていこうという、力強い告白に聞こえる。

新約聖書・ヨハネによる福音書は、イエス・キリストの「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である。(中略)しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。」(ヨハネによる福音書14章16～17節)という言葉を書いている。ヨハネ福音書は、イエス・キリストが捕らえられ十字架にかけられる直前に弟子たちに語りかける長大な「告別説教」(14～17章)の一部としてこの言葉を記録している。

「弁護者」(παράκλητος)は語源においては「傍らで呼ばれるもの」という意味を持ち、口語訳聖書では「助け主」と訳されている。イエスは弟子たちのもとを去るが、弁護者・助け主として目に見えない「聖霊」がいつも弟子たちとともにいるようになる、というのである。弟子たちはこの聖霊の働きかけを受けつつ(受けていると信じて)、イエスの教え・生き様に従い続けるのである。

「霊」を意味する言葉プネウマ(πνεῦμα)は、また「息」や「風」をも意味する。「神ははたして存在するのか―人類は長いことそれについて検討してきた。存在するかあるいは存在しないのか。いずれの場合にも、神を“存在”という枠の中で論じていたことに変わりはない。この前提を外して考えられないものなのか(中略)。今はいない神、しかし自らの<時>を携えて触れてくる神(不在の神)ならば、それは風のようなものと言えないだろうか。(中略)互いのいのちに共鳴する時こそ、無限者の触れてくる瞬間ではないか。人が人となる一貫して響き合う―そこには沈黙の風があったのだ。こうして不在の神は、吹きすぎる<風>の中にある」(前島〔2005〕p 85-86)

3. おわりに

本稿では、ウルトラマン・シリーズ中の一エピソードを、現代における一遍の民話と捉え、宋や栗林の「民話の神学」のアプローチに倣いつつ、そこに語られているテーマと、聖書のメッセージとの間に「ひびき合い」を聴き取ろうと試みた。その主な結節点として見出したのは、「異者」・「他者」に向けるまなざしのありようであり、「いまだ」と「すでに」の間を生きようとする自覚であった。

いまだ無いものを、すでにあるものとして受け取り、今・ここを生きる決断こそ、「憧れ」、「dream」そして「信仰」という言葉において表現される終末論的な生の姿勢なのである。

【注】

- ¹⁾ 「宋はキリスト教の啓示における顕在的キリストと、非キリスト教宗教の潜在的キリストとを互いにダイナミックに関わらせる弁証法を提案した。キリスト信仰は神の神秘を理解する唯一のものではなく、また他宗教を抑圧することがあってはならない。キリストの信仰はいわば『焦点』であって、そこから歴史を解釈し、非キリスト教文化においても神に応答する力を得ることが可能である。」(栗林〔2010〕 p74)
- ²⁾ 「『信じる心・物語神学への招待』(1999 年)のなかで宋は、生命、希望、信仰、愛などのキリスト教の中核概念を、アジアの民衆物語に相関させて探求を試みたが、そこで活用されたのは、台湾の市場やパレスチナの占領地の文脈と仏教や儒教の物語だった。宋の神学上の確信は、イエス・キリストに受肉して聖書に証しされた恩寵の神は、この世の貧しい者を通して知られる神ということにある。」(前掲書・p74-75)
- ³⁾ 「もし物語が受肉したキリストの光のもとにあるならば、それはまずもって権力から排除された者、不正義な経済制度、人種主義、性差別によって抑圧された人々の物語として浮かび上がってくるはずだと、考えたのである。」(前掲書・p74-75)
- ⁴⁾ シナリオでは公園のシークエンスに先立って、本来の異星人の姿のまま出かけようとするキーフを駄が押し止め、人間の姿に変身するよう説得する場面がややコミカルに描かれているが、映像作品からはカットされている。
- ⁵⁾ 太田愛 公式ホームページに掲載のシナリオ本文より (<http://www.h7.dion.ne.jp/~glarphan/>・2010年11月1日取得)
- ⁶⁾ 「僕は当時三十代前半で、燃えてる時代というか、我々は安保世代ですから、口には出してはいけないものも、表現の形を借りて出してしまうという姿勢があった」(切通〔2000〕 p208)
- ⁷⁾ 「レビ19・8の『隣人』がどういう人を指すのかは、旧約史においてもユダヤ教解釈史においても一定しない。旧約本文では、ユダヤ人でなくてもパレスチナ在住の人を含めるが(レビ19・34)、後期ユダヤ教<マナ>は、民族主義の高まりとともに、隣人から他民族を排除してゆく過程をたどる。このような背景のものに、律法学者は『では、わたしの隣人とはだれですか』と尋ね返すのである」(三好〔1991〕 p325)
- ⁸⁾ 死体に触れることはけがれをもたらしとされていた(辻〔2010〕 p33)。ただし「道を下って来た」のであれば従事すべき祭儀はすでに終えており、必ずしも清浄を保つ必要はなかったとも考えられる。
- ⁹⁾ 辻〔2010〕によれば、(史的)イエスはむしろ隣人愛に否定的であり、むしろ隣人愛が抱える限界や矛

盾を「愛敵」の要求によって批判的に浮き彫りにしようとしたのだという。辻は聖書の諸文書の中に、またキリスト教の思想的発展過程の中に、普遍的な「隣人愛」への指向と、狭量な「隣人」愛への指向が交錯していることを明らかにしている。

¹⁰⁾ 「キリストが精神と動機を与え、ガンディーが方法を備えたのである。」(カーソン [2001] p89)

¹¹⁾ 「《時》(カイロス)は神の計画の中で定められている終末の救いの時。そのカイロスまでに経過すべき期間が満ちた、すなわち『時は来た』。」(川島 [1991] p172)

【参考文献】

『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1987年。

C. カーソン編、梶原寿訳『マーティン・ルーサー・キング自伝』日本基督教団出版局、2001年。

C. S. ルイス「宗教と宇宙開発」『栄光の重み』新教出版社、1976年。

ハビエル・ガラルダ『アガペーの愛・エロスの愛』講談社現代新書、1995年。

本田哲郎『小さくされた人々のための福音』新世社、2001年。

川島貞雄「マルコによる福音書『新共同訳聖書注解Ⅰ』日本キリスト教団出版局、1991年。

切通理作『怪獣使いと少年 ウルトラマンの作家たち』宝島社、2000年。

栗林輝夫「アメリカのアジア神学と日系神学(上):オリエンタリズムからポストコロニアルへ」『関西学院大学キリスト教と文化研究』第11号、関西学院大学キリスト教文化研究所、2010年。

栗林輝夫『日本民話の神学』日本キリスト教団出版局、1997年。

前島誠『不在の神は〈風〉の中に』春秋社、2005年。

三好迪「ルカによる福音書」『新共同訳聖書注解Ⅰ』日本キリスト教団出版局、1991年。

宋泉盛著、岸本羊一・金子啓一訳『民話の神学』新教出版社、1984年。

辻学『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010年。

山浦玄嗣訳『ケセン語訳 マルコによる福音書』イービックス、2003年。

大槻虎男『聖書植物図鑑』教文館、1992年。

大貫隆他編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年。

馬場嘉市編『新聖書大辞典』キリスト新聞社、1971年。